

長野県革新懇ニュース

2022 年 3 月号
発行日 3 月 10 日
会 費 2,000 円
購読料 3,000 円 (送料込)
振 替 00510-3-15971

273

発 行 日本と信州の明日をひらく県民懇話会
(長野県革新懇) 発行人：山口光昭 編集長：高村裕
〒380-8790 長野市県町 593 高校教育会館内
TEL：026-234-1231 FAX：026-234-2219 メール：mail@nagano-kakushinkon.com

====今号の主な記事=====

- 1 面 神谷さだ子さんインタビュー
- 2 面 1 面続き、「近現代信州の歴史回廊」小平千文さん
- 3 面 ロシアのウクライナ侵略を糾弾する 他
読者の声、漢字パズル
- 4 面 雨よ降れ「傘寿」哀しや 窪島誠一郎さん
写真で辿る信州と戦争「神風特別攻撃隊員の墓碑」北原高子さん
映画評論『コレクティブ』 内山到さん

長野県革新懇

検 索



1992 年から日本チェルノブイリ連帯基金に関わる。
ドキュメンタリーフィルム『ナージャの村』『アレクセイと泉』をプロデュース。

原発のデメリットは 決定的に大きい

か み や
神谷 さだ子 さん

(日本チェルノブイリ連帯基金事務局長)

チェルノブイリから 医療支援の SOS

Q 日本チェルノブイリ連帯基金
の紹介をお願いします。

今の理事長の鎌田實先生や
前の事務局長だった高橋卓志
さんなどが「ボランティアで
社会づくりを」という構想を
考えていて、集まりをもって
いたのですが、あるメンバー
にモスクワから「チェルノブ
イリで大変なことが起きている
」と SOS が届き、医療
支援を求められたようです。
最初に東京の医師の方々に
支援をお願いしましたが、さ
まざまな事情で応じてもらえ
ませんでした。一方で、菅谷
先生をはじめ信州大学の医学
部の先生方が協力を申し出て
くださり、医療支援活動が始
まりました。このことが日本

Q チェルノブイリ支援の具体的
な内容をお聞かせください。

JCF が最初に現地に行っ
たのは1991年の1月でし
た。1月9日に湾岸戦争が起
きていたころです。とにかく

信大医学部と共同で 全面的な医療支援

チェルノブイリ連帯基金（J
CF）設立の契機になりました。
多くの医療者が現地へ行
かれましたが、皆さんが口を
揃えて言われたことは、医療
がとて遅れていて日本であ
れば助かる命が救えないとい
うことでした。特に子どもた
ちに甲状腺ガンが増えるので
はないかと菅谷先生たちが予
測され、また、広島、長崎の
原爆投下後のデータから子ど
もたちに白血病も増えるかも
しれないと、信大医学部の小
児科のお医者さんが大きく関
わって下さいました。信大の
お医者さん、看護師さん、検
査技師さんなどの医療者が協
力してくださったのですが、
それをリードされた鎌田先生
と高橋さんのお力がすごく大
きかったと思います。

こうした活動は松本でしか
できなかったと思っていま
す。全国にもチェルノブイリ
支援の市民団体はいっぱいあ
り、年に1回ぐらい連絡会を
開いていましたが、大学病院
関係者と私たちのような一般
市民、さらに民間団体が協力
し合って活動が続けていると
いうのは珍しいです。松本市
浅間のこの建物は中日本メ
ディカルリンクという医療機
器の会社が持っていた建物で
すが、JCFで借りています。

見に行こうということで、ロ
シア、ウクライナ、そして、
一番被害がひどかったベラ
ルーシを回りました。鎌田先
生も一緒でしたから、医療水
準が非常に遅れているという
ことは見てとれたわけでは
ないです。旧ソ連は、軍事と宇宙開発に
国家予算のほとんどを注いで
いたので、医療などは30年か
ら40年程度遅れていたのだ
です。何とかしたいということ
で、帰路の列車の中で、薬品
を送ろう、現地のお医者さん
たちに頑張ってもらおうよう
な支援をしよう、全国の皆さん
に寄付を呼びかけて医療機器
や医薬品を送ろうというよう
な支援のあり方が組み立てら
れました。

そのころベラルーシでは検
査さえも十分にできず、医師
も喉元にある甲状腺のしこり
を診断する技術さえも持って
いませんでした。だから、現
地のお医者さんと呼んで、信
大で研修を受けてもらい、現
地で活かしてもらいました。

菅谷先生も96年から5年半行
かれましたし、小児科のお医
者さんたちは、ベラルーシで
現地の医師が白血病の子ども
に自家移植をやるのをサポー
トしたりしました。多くの医
療関係者が交代で年に5、6
回と訪問を続け、2000年
に入るころにはある程度の医
療水準に達したといえる状況
になりました。

また、まだ十分使えるにも
かかわらず廃棄されてしまう
医療機器をベラルーシに送ろ
うというプロジェクトに4年
間ぐらい取り組みました。J
CF が今の建物へ引っ越した
こともあって、1階の倉庫に
集められた医療機器をメディ
カルエンジニアの皆さんがメ

Q 神谷さんとJCFとの関りを
お聞かせください。

若い時にロシア文学に興味
を持ち、かなり傾倒しまし
た。たまたま1992年に夫
の転勤で松本に来た時にJCF
という団体が浅間温泉の神
宮寺に設立されていることを
知り、ロシア語でなら多少の
お手伝いができるのではない
かと思い、ボランティアを申
し出たのが関わりの始まりで
す。

ロシア文学への関心が 関りのきっかけ

私は92年8月の第10次訪問
団から参加しました。そのこ
ろ菅谷先生も甲状腺の検診な
どを3人の医局のお医者さん
たちと一緒にやられていまし
た。JCF 設立から31年にな
りますが、この間に101回
の医療訪問団と13回のスタ
ディーツアーを行なっていま
す。私は医療訪問団には70回
以上、スタディーツアーは13
回参加しています。加えて、
JCF の直接的な事業では
ありませんが、支援活動のつ
ながりの中でドキュメンタ
リー映画『ナージャの村』と
『アレクセイと泉』という2
作品の製作に全面的に関わり
ました。ですから、ベラルー
シには家族や友人のような付
き合いができる方が沢山でき

ました。
チェルノブイリの実態をこ
の目で見えてきたので、原発事
故を起こせば大変なことにな
るということを感じてきてい
ました。初めて行った時です
が、爆発事故を起こした4号
炉の前に立つと、ガイガーカ
ウンター（放射線測定器）が
すごくピ、ピ、ピと鳴るわけ
です。そして、汚染がひどかつ
た森の中に入ると、やはり鳴
るんです。放射性物質はすこ
く微粒で、五感に感じないも
のですから、ガイガーカウ
ンターが鳴っても、そこが高度
に汚染されているという実感
が湧きません。

チェルノブイリ原発から
180 km くらい離れたところ
にベラルーシで2番目に大き
いゴメリという街があり、も
のすごく汚染されました。そ
こは、事故から4、5年経っ
てから高汚染地だということ
が分かって、強制移住をさせ
られた村がいくつかありま
す。そして立ち入り禁止にな
って、放射能汚染マークの
立て札がいくつか立てられる
のですが、そういった「埋葬
の村」がロシア、ベラルー
シ、ウクライナで合わせて
6000はあると言われていま
す。ゴメリ州に行った時は
事故から6、7年経っていた
のですが、かつて村には建物
がずっとあったはずなのに、
まったく撤去されてしまっ
て、更地になっていました。そ
ういった「埋葬の村」を見た時
に「ああ、原発事故ってこう
いうことなんだ。それまで普
通に暮らしていた人たちの暮
らしがなくなってしまうとい
うことなんだ」と実感できま
した。